

系統的なキャリア教育システムでの評価指標の分析

Analysis of Estimative Index in Systematic Career Education System

○羽瀧 仁恵¹、稲葉 成基¹、所 哲郎¹、田島 孝治¹ (1. 岐阜高専)

°Hitoe Habuchi¹, Seiki Inaba¹, Tetsuro Tokoro¹, and Koji Tajima¹

(1.Natl. Inst. Technol., Gifu Coll.)

E-mail: habuchi@gifu-nct.ac.jp

【はじめに】岐阜工業高等専門学校では学生の自主性を引き出すためいくつかの取り組みを実施している。全学的に科学技術リテラシー教育実習を行い学生が自主的に活動できる機会を提供し、地域貢献や岐阜高専のブランド化に寄与している。また、各種資格、TOEIC等をポイント化する制度を導入して学生の自主的な活動を活性化させた。1) 卒業後、新産業や国際社会に耐えうるよう学生を育てるためには、リテラシー能力とコンピテンシー能力を鍛える必要がある。コンピテンシーは主体性、積極性といった行動力や思考に関わるものであり、本校ではGrit(やり抜く力)と呼んで、これを育てるためのキャリア教育を実施している。1年生から5年生(専攻科の場合は2年生)まで系統的にキャリア教育ができるようにプログラムを作り、さらに評価指標を設定し教育効果を検証できるようシステムを構築した。2,3) 評価指標は今まで漠然だった学生のキャリア能力を可視化し、キャリア教育の改善につながるものである。本発表ではこの評価指標について分析を行ったので発表する。

【方法】評価指標は学生の作文、授業の欠課回数、課題提出率、専門科目の成績、TOEICのスコアなど本校で集計できるものと、学外のPROGを用いる。PROGとは河合塾と㈱リアセックが共同で開発した学生のリテラシー能力とコンピテンシー能力を数値として評価するものである。このPROGは本来可視化しにくいコンピテンシー能力を、質問の回答を統計的手段により数値化したものである。

【結果】課題提出率の学年平均は3年までは学年が上がると低くなっていく。これは課題が難しくなってくことや、学校生活に慣れて課題が遅延や未提出でもなんとかなるといった学生の認識などが要因と考えられる。しかし、課題提出率はPROGのどの指標と比べても相関関係は低い。むしろ、抱負などの作文の評価に相関性が見られる。

PROGのリテラシー能力とコンピテンシー能力は第3学年まではほぼ横ばいであったが、第4学年で両能力は急激に伸びている。就職や進学を意識する学年であり、コンピテンシー能力が高くなるのは予想されたが、リテラシー能力の伸びは注目すべき点である。コンピテンシー能力を高めることが、リテラシー能力にも効果が及ぶのなら、キャリア教育はリテラシー能力をも育てる側面があると言える。本教育研究の一部はJSPS科研費 JP15K00945の助成を受けた。

【参考文献】

- 1) 稲葉他:工学教育, Vol.61, No.1, pp. 123-127, 2013.
- 2) 稲葉他: 日本工学教育協会第66回年次大会(2018年10月28日), 3E12.
- 3) 羽瀧他:第66回応用物理学会春季学術講演会(2019年3月9-12), 11p-PA7-2.